安部公房『第四間氷期』論  S F ・仮説・グロテスク

<table>
<thead>
<tr>
<th>著者</th>
<th>杢谷 英紀</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>日本文藝研究</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td>10</td>
</tr>
<tr>
<td>号</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>135-156</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>2014年10月</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://hdl.handle.net/10236/12482">http://hdl.handle.net/10236/12482</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
花田清輝は、日本における早い段階でのSFについてはの評論である『科学小説』において、「SFをフランケンシュタイン的な怪物にすることを考えた」。また、「SFは科学小説であり、科学についての考察を含む」という点を強調している。

一方で、花田はエッセイ「SFの発展について」で、「SFの発展は、科学技術の進歩に伴い、科学的知識の増加に伴い、SFが科学技術の進歩を反映する」と述べている。

SFにおける「怪物」の例として、「怪物」が挙げられたわけだが、花田はフランケンシュタインの怪物の内面を捉えて、「この怪物は、科学技術の進歩を反映する」と述べている。

花田は、SFにおける「怪物」の内面を捉えて、「この怪物は、科学技術の進歩を反映する」と述べている。
魚が主人公の分身を食べているという「人魚伝」（文学倉）『九人二・六』といったSF的な作品では、特にグロテスな表現が目立っている。ゲロテスとSFの関係について、座談会「科学から空想へ」（『世界』九五・八・一で安部は次のように発言している。安部公房『第四回永期：論』

無限の可能性を求める非合理的な体として人間を考えるなら、たとえば恐怖という概念もなくなるのだ。それはたとえばSFの世界で、宇航員が未知に対決しなければならないことになる。だから從来のSFの世界を再考してみた時、最近ではジェスナーの空想科学小説で、そういった新しい恐怖の発見や展開に可能性がある。
遙か未来で地球の人々は、彼らを育てたビッグデータの樹木が葉を落としていた。それは彼らの生命を支えてきたものであり、その倒れは彼らの文明の終焉を告げていた。

しかし、10年後、彼らはその倒れを再び見ることができる。それは彼らが失った過去を再構築するための鍵を握っていた。その鍵は、彼らが未知の世界を探索するための機械となる。

この機械は、地球を救うために作られた。それは巨大なスーパーコンピュータであり、その能力は人類を超えていた。

しかし、その機械の運用は難航していた。それは、彼らがそれを使い方を理解することができなかったからだ。その理解を助けるのが、彼の存在だった。

彼は、地球の科学者たちに、その機械の強大な能力を説明した。彼は、その能力の全てを彼らに教えた。しかし、それは彼らが理解するのを難しくしていた。

彼らは、彼の説明を信じることができなかった。彼らは、彼が彼らを欺いていると考えていた。しかし、彼の説明は正しい。それは彼らが、その機械を活用するための鍵を手に取り、彼らの文明を再構築するための鍵を握ることだった。

彼らは、彼の説明を信じ、その機械の能力を活かし、地球を救うために奮闘した。その結果、彼らの文明は再構築され、彼らは新たな未来を切り開いた。
造・思想性について考察する。

予言機械こそ最初に登場する「グロテスク」な「仮説」であるといえよう。工業的再生産の頂点ともいえるテクノ
ロジーを持つ予言機械は物語が進むにつれ、まるで生物であるかのように見えるようになる。たとえば「機械が勝
手に動きそうな気がした」（6）、死体から情報を得るため、予言機械が死体の人格方程式を読みとり会話す
見に感じさせる。このような擬人化された機械、そこに「グロテスク」の具体があると考えてよい。次は脅迫電話を
かけてきた「第二次予言値」に「誰でもいいから、かわってくれ」、勝見が叫ぶ場面。

「かわりますか？」と彼が振り向いて声をかけ、すぐにはなじめた和田の笑声がそれに応じて消えた。

「だって、先生が、自分の大切な人がいる以上、あなたが顔を出すなんて、どう見てもこっけいな話だ。しかし、こ
の私の言うことは、いったいどういうことになるのだろう？（39）

予言機械は一つの複製技術である」と指摘したクリストファー・ボルトムは、「第二次予言値」という複製品が
自分の原型までも抹殺して、完全なシミュレートルームになる過程を「アインデンティティの危機」として捉えてい
る[7]。ここでは、勝見には冷たい和田が予言機の第二次予言値には「はなやいだ」笑顔で返答するシリンダー
は冷淡である。和田の中では、「第二次予言値」こそが本体の勝見であるかのように見える。後の安部は、「仮面」が
意識を持って動き出す「他人の顔」（九六四－九、講談社）や鷹箱男と本物の箱男が絶縁する「箱男」（九七三－二
三九）
新潮社）においてアイデンティフィケーションが現される不安を誘ったが、同様な不安を取り除かれたように書き続けられたSF作家にフィリップ・K・ディックがいる。ディックの初版の短編小説『外来者』をこの時期の安部が読んでいるのを参考にしてみた。

岡本太郎との対談『宇宙・人間・芸術』で、安部は作品名や作家名は挙げていないものの、『外来者』のプロットを説明している（8）。安部が読んだのは、宇宙科学小説シリーズ『アルフ・コンクリン編』下巻連載、東京丸善版『九五七・一〇』であろう（9）。地球と交戦中の星から地球にやってきた、自分が地球人オルハムだと信じているロボット爆弾があらためて爆発するという短編小説であるが、読者にもそればわからない。しかも読者と記憶を奪ってしまったシミュレータが、人間の自分を誤って方針をも奪うというディックらしいテマが描かれており、安部は対談において、『外来者』について「実に必然的だけど、グロテスクだ」と、『ポーあたりの一種の伝統だと思われる』として、こういう合理性と、極端なフィクションなものとの結合を高く評価している。自分が自分があるという証明はできないから、自分がロボットであっても不思議はないという論理をもとに物語が組み立てられている。もしそれがオルハムなら、僕はロボットに何から爆発が起きる…。ディック作品でも最も早く邦訳されたと思われる作品である。外見を脅威に変えると、規模を拡大するという爆発を傷つけている。
三、リプロダクションと政治／仮説の構造

プログラムカードNo.2に至って、勝見と頼木は日本研究所で水稲哺乳類の製造工場を見学する。その湿度感のある生々しい様子を見せられた勝見が「かなりそそった」という。しかし、勝見と顧木は山本研究所で水稲哺乳類の製造工場を見学する。その湿度感のある生々しい様子を見せられた勝見が「かなりそそった」という。山本博士は「一般に隔絶した未

具体的に時代と「グロテスク」な表象との関連について光をあてた。

読者たちのもたらしような世界に連れて行かれている。そこで戦略的な「新しい恐怖」があるのではないか。次に、より

暗い水の中からじっとこちらを見つめている、生まれはずのなかった私の子供……（略）枕の上にあぐらをかいて、妻との
自分の子どもが水棲生物として「じっとこちらを見つめている」という意味深い感覚を味わうことに、緊張が脈動する。どんな生体も、水棲環境においては、様々な役割を果たしている。したがって、子どもたちが水棲生物としての自己実現を追求するためには、まずその可能性を捉えることが重要である。

一方で、山本研究所での水棲生物類を産出する場面では、子どもたちが成長する過程における観察が重要である。この場面を観察することにより、子どもたちの成長の様子が捉えられる。それらの観察を通じて、子どもたちが生体としての自己実現を追求することができる。

まもなく、緊張が脈動する。子どもたちが水棲生物としての自己実現を追求するためには、まずその可能性を捉えることが重要である。したがって、子どもたちが水棲生物としての自己実現を追求することができる。
である。和田は「私、先生を裁判しようと思っているんです」と宣言するが、何気なく繰り返される勝見の「そんなこと、考えておら、きりがない」という答えが勝見の死刑判決の決め手となったと考えられるから、未来についてのイメージが氾濫するテクストにおいて、臥胎についての問題は未来を考察する直接的な課題であったということになる。ここでは、抽象的議論を避けてテクストにおいて考えてみたい。

まず、一九五八年当時の日本の人口政策について考えた。戦後、占領下の日本は、旧植民地からの市民及び兵士の帰還、戦後ビーチームにより急激な人口増加に直面していた。その際、日本の経済復興のために大きな効果を上げたのが、一九四九年に改正された「身体的又は経済的理由により母体の健康を著しく害するおそれのある」場合に中絶を許可するという条文を加えたのが、一九四八年に制定され、一九五三年から一九六一年まで中絶の件数が年間一〇〇万件を超える。報告されないものを含めると、頼木の言う「年三〇〇万以上」というのは特例に誘張されたものともいえない数字である。ちなみに、「第四次産期」が連載されていた一九五八年が報告された中絶件数は、一二八、三八四件でピークとなっている。

また、優生保護法の性格は、一面で、たとえば、朝日新聞」に掲載された慶應義塾大学教授の林謙の「悪い胎児を残さないためにどうしても臥胎刑法を撤去しなければならぬ」といった発言に表れている。林謙は、安部がこの時期に執着したバブルの「条件反射」を日本に紹介した人物でもあるが、かといって安部が林と共鳴したとは思えない。林の「人体の中に入っていているものに対する態度は、生まれてしまった人間に対する態度と混同してはならない。
いという言葉は、勝利の『まだ意識のないものを、人間と同格にあつかうわけにはいかない』という言葉を想起する。勝利の言葉は和田によって『でも、妊娠九ヶ月でまだお腹にいる子供は殺してもかまわないけど、早産で先に生まれた子供は殺しちゃいけないなんて、ずいぶん便のわだ』と論破されることから、むしろ林のような優生学の再産を指す言葉としても使われ始める。
二つのゲノミクスの怪物・すなわち生物学研究所の水槽哺乳類の生殖システムと予言機械とは、後者がシミュレータ
ルを製作する機能を持ちることを思うと、まさしくともにリプロダクションのシステムということがある。それは、山
本研究所と予言機械との『仮説』が、ともにリプロダクションのシステムを構造して行わなければ、生物学的再生産に、テクノロジーが介入することで『生殖技術を行う
する大半が男性、対象とするのが女性という役割分担がエスカレート』したという。たしかに、荻野美穂は、
『避妊（および初期に避妊をするが、女が自分で自分の人生を管理し、決定権をもつための不可欠の条件としているマ
ガレット・サンダー）アメリカのマーケット・コントロール運動の指導者』が、『運動への支持を獲得するためにはすん
で医学や優生に接近し』た結果、『科学専門家が圧倒的多数は男であったから』『生殖を管理する主体がきっかけと女から
男に移った』という状況を報告している（22）。

「じゃあ、堕ろして言うのね」「誰もそんなことを言ってやらないよ。君の判断にまかせるって言ってるんじゃない
か」「あなたのお気持ちを聞いてくね、どうでもいい……」（23）

勝見貞子は堕胎について夫に相談するが、勝見は聞く耳を持たない。それで電話で呼び出されたので「とにかく、
先生に相談してみるつもり」で病院へ行った後、貞子は『政府にまかせる権限をもっている』という海基会発表と
責任が転移していくバースコントロールの戦略ともいえる構図が描かれているのである。同様にもう一つのリプ
ロダクションである予言機械もまた、産みの親である勝見から奪われ、いつの間にか海基会発表という大きな権力
にと譲渡していき、最終的にはそれは『政府にまかせる権限をもっている』という海基会発表と責任が転移していくバ
ースコントロールの戦略ともいえる構図が描かれているのである。同様にもう一つのリプ

安部公房『第四開発』論

一四五
四、人間は改造成れるか ／ 仮説の思想性

山本研究所における生物学の説明について、磯田光一、鳥羽籍史によって、ソ連のミチューリン生物学の提唱者（イセンコの遺伝学説に従って、ソ連でソビエト連邦の政治を投じたことが指摘されている。）らバイオロジーの読み込むという点で興味深い。そこで、安部が一九五八年の二つのエッセイである『断絶した未来』とは、実は政治的にグロテスクな奥行きをもつ現在の投げなものである。

なぜ、勝見は自分の子どもを殺そうとするのか。一つには、『息子を片輪の奴隷にされた』という言葉からも判るよう、彼の道徳思想があるともいえる。しかし、先に触れた自分の子どもの『見破られた水の中の眼』というグロテスクなイメージこそ、その動機であろう。ここでは、勝見と山本博士との二人のフランケンシュタインによる結びつける『怪物』の構造を捉える必要がある。このグロテスクなイメージは、生物学的再生産と工業的再生産を結びつける『怪物』という政治を投影したものであり、『急傾斜な自己破壊』、『愚鈍なうぬぼれに対する』妻の、あるいは女性の男性に対する『復讐』としての現実の投げは、『復讐』から逃れるためにわが子殺すことを考えたのだった。グロテスクな『断絶した未来』とは、実は政治的にグロテスクな奥行きをもつ現在の投げのものである。
山本研究所で「あそこに、人工の産業というわけですね」と頼木が興奮気味に言う場面があったが、『素晴らしき世界』の「中央発化、環境調節場」も『第四開氷期』の山本研究所でも、生物学的な生殖が工場の製造過程と重なることの役目などというものがやはり解放され、「かつて神聖視されていた母」という言葉は当を得ていない、馬鹿げたものとなる『未来図』について、性差の意味がなくなることを強調している。他にもロスタンは、ヴリエ・ド・リラダンのロボット小説『未来のイヴ』（八八）に触れ、「詩人の残酷な皮肉で、自然と人工、生命あるものと機械的なものの間の関係の全部にわたる問題を提起している。」ことや、機械と人間の行動の相似に感動したサイバーニューニックス党のボルトンは、『第四開氷期』の戦略として「バイオテクノロジー、遺伝工学、サイバネティックス等の身体を操作する技術は、自然と人工や人間と機械との境を曖昧にする」ポストモダ麟理論があることを論じたが、ロスタンは他にも「為沙漠」や「積極的優生学」を通して人間を塑造し、超人をつくることは、果て望ましいことであろうか」と問題提起している。この問いは、勝見が山本博士に対して発した「この夢みたいに研究にしても、そんなでないですね」のような理由があることを聞いた。
しゃるのですか？”という問いに寄しい。対する山本博士は強く反対いて種姓権利類の習慣の可能性を暗示した。が（24）、後に「人類は進化を、偶然的なものから、意識的なものに変える力を獲得した」と（次は）、「人類自身、野性から解放され、合理的な自己を改造すべきだ」という積極的ないわらの考えを披露している（35）。
ロスタンの答えは、まず人間を進化的所産、広大な宇宙の中にもおそらく二つと同じ種族のない、再現不可能な可能性はあっても、決して超人に関心するのかも知れないし、自己が積極的に素晴らしい世界だからなのだ。著者の立場はどう考えているのか。「人類未来史観序説」において、安部は、人類は、相対的、いわゆる積極的な仮説を前提にした思考を必要とする思考を非難している。しかし、「人類は進化する」という仮説には、生殖において性差、人類（機械物）と機械物との差別といった常識的な仮説を差し引かせざるを得ない思考である。安部は、「人類は改造されるか」が「人類は改造されるか」という問いに対して、「それは否定する。むしろ、安村に「人類は改造される」と説いている。しかし、「人類は改造される」という仮説には、生殖における性差、人類（機械物）と機械物の差別という仮説を差し引かせざるを得ない思考である。
五、仮説としての死

方法と主題

最後に「ブーリント」に示された「地上病」の少年の物語について考えてみたい。連載当時は短い掲載にすぎなかったが、単行本化された際、分量にして八倍ほど加筆され、読後の印象にも大きく影響するものの一つになっている。地上の「風」の意味を無性に憧れていた水曜日の少年がいた。「風」が音楽であるか何か「自分で過しかけなかった」という風が強く吹き寄せた小島に遭い上がった彼は「スクーター」なじゃない。「風」は世界のすべての重さとこの重さを、自分だけが一択に吸い上げてしまったように、ずっしりと重く、そのまま地面にへばりついたきり、身動きできなかった。「風」が音楽であるか何か「自分で過しかけなかった」という風が強く吹き寄せた小島に遭い上がった彼は「スクーター」なじゃない。「風」が音楽であるか何か「自分で過しかけなかった」という風が強く吹き寄せた小島に遭い上がった彼は「スクーター」なじゃない。
であろう。これには、安部が若い頃に親しみながらマルティン・ハイデガーの存在論と時間論（一九二七）の影響があると思われ、ハイデガーは人間を生存に向けて捉え、人間が生存の在り方を考察した。SFは思索的な側面をもっているものであるが、第四段階期は、ハイデガーの考え方を進めて、予言機械によって未来において意志を持たせるという仮説を立てて（33）、人間存在を追求したといえる。未来を設定することにより得られるのは、現在に対し境界線をひくことがであろう。未来という境界線によって、現在が分断され、自分自身を理解するのである。未来の自分であるグロテスクな表象を見たとき、それは、勝見を果たして勝見だけだろうか。それは、勝見だけではない、物語を読み終えようとする読者ではないだろうか。途中で死を意識させられた勝見は、なんとか生き残ろうと躍起になる。その焦燥は読者に直接的に訴え、読者を不安にする。しかも、予言機械をはじめとして롭木たちは、「先生がこの結論をお知りになったこと、あるいは答えを変えてしまうような条件を、先生がつかまれるのはいかがか」という期待をかけ、処置までを様々な議論を進めえていたのであった（31）。答えを変えてしまうような条件を見つけることは、読者にも求められていたということである。もちろん、結果としてそのものはみつからなかった。
これは和田の言葉だが、頼木たちの勝見に対する働きかけは、「事実を問の形に変えることだっただとも考えられ
る。そして、それは勝見を通じて読者に対しても投げかけられた問いであった。「事実を問いの形に変え」るとは、
頼木の言葉でいえば「量的な現実を、もう一度質的な現実に総合する」ということになるが、「問いの形」＝「質的な現
実」とは、本稿で論じてきた戦略的で思想性をもつ構造体である「仮説」と等価なのではないだろうか。このような
主題と方法との重なりに「第四問水期」のリアリティがある。

安部のSFの方法について検討した本稿では、「第四問水期」に用いられた方法的意識の下に設定された「仮説」
の具体について、その戦略性、構造、思想性などの側面から考察を加えた。安部にとって、SFの方法とは、さまざまな時代や政治や制度などの「量的な現実」を総合して「質的な現実」に還元し、「仮説」という「問いの形」にし
て読者に提示することであった。

注(1)
安部公房「第四問水期」論
「日本における最初の本格的長編SFである」と評価している。

注(2)
安部公房「第四問水期」論
「世界SF全集」第二七巻　早川書房　一九七八・五月　において

引用は「花田清輝『科学小説』『近代の超克』未発表　一九五九・九」

五三